

Tom Wheeler, *MR.Lincoln's T-Mail : The Untold Story of How Abraham Lincoln Used The Telegraph To Win the Civil War*

松田 裕之*

I 大統領とニューメディア

丸太小屋^{ログハウス}に生まれた田舎弁護士は、国家分裂の危機が迫る1861年3月5日、大統領官邸^{ホワイトハウス}に入った。歴代大統領のなかで最も尊敬を集めるエイブラハム・リンカーンをめぐっては、正義と信念に彩られた高潔な、ともすればステレオタイプのな人物像だけでなく、彼をとり巻く時代状況や人間関係に目配りしつつ、その秘めたる野心や権謀術数、はたまた変節や情愛といった内面にまでメスを入れた著述・研究も世界各国で発表されてきた。

本稿がとりあげるのはしかし、従来の評伝的なアプローチとは異なるアングルから、リンカーンという稀有な個性の約5年にわたる日々を叙述した物語である。その日々は南部連合国と北部連邦国との泥沼の内戦に費やされ、終戦とともに尽きる。

当初は軍事に疎いと目されたリンカーンであるが、内乱が長期化するなか、次第に戦略全般の策定、ひいては指令官の人事にまで直接権限を揮い、連邦国側を勝利に導いていく。彼が不屈の軍事指揮官へと変貌を遂げ、骨肉相食む無慈悲な総力戦^{トータル・ウォー}を戦い抜けたのは、はたしてな

*松田 裕之 (Hiroyuki MATSUDA) : 甲子園大学現代経営学部准教授。関西大学大学院商学研究科博士課程修了。博士(商学)。『ATT労務管理史論』(ミネルヴァ書房, 1991年), 『電話時代を拓いた女たち』(日本経済評論社, 1996年), 『通信技手の歩いた近代』(日本経済評論社, 2004年), 『物語 経営と労働のアメリカ史—攻防の1世紀を読む—』(現代図書, 2006年) など。

にごとによってなのか?

Tom Wheeler, *MR.Lincoln's T-Mail : The Untold Story of How Abraham Lincoln Used The Telegraph To Win the Civil War*, Harper Collins, 2006 [227.pp+xxi] は、その疑問を解く鍵として、電信 (telegraph) の存在をクローズアップする。そして、リンカーン自らの手になる1,000通近い電信用の元文書ならびに各方面軍の司令部よりリンカーンに届いた電報—— Wheelerはこれらに《E-Mail》をもじった《T-Mail》なる呼称を冠す——を丹念に調査して、彼が戦争遂行にあたりどれほど電信に依存し、それをいかに活用したのかを具体的に解明しつつ、権力と武力を最新の情報通信メディアによって強化していく国家指導者の原型を描き出したのである。

II 知られざるリンカーンの戦い

まず、「序文 (Introduction)」は、2003年3月に始まるイラク戦争を「e-mailによる戦争 (war by e-mail)」と捉えたうえで、情報通信メディアの力を軍事にフル活用する「現代型」戦争 (“modern” war) の起源^{ルーツ}を「19世紀のアメリカ南北戦争 (the 19th-century American Civil War)」に求めている。

そのキーパーソンこそがリンカーン。Wheelerはリンカーンを「まったく自力で、電信というテクノロジーを使いこなして北部連邦に有利な戦局を創り出した」と評価し、「偉大なる人物に関してこれまで語られなかった最も偉大な物語」へと筆を進めていく。

第1章「電気によるリーダーシップ (Electronic Leadership)」は、南北開戦前後の中央政府内での電信の活用状況に触れたあと、リンカーンと電信の結びつきを考える手がかりとして、彼が革新的なテクノロジーに並々ならぬ好

奇心をもっていた事実を指摘する。この資質を下地として、リンカーンはモールス電信というニューメディアの価値をいち早く認識し、戦略策定に不可欠な情報収集や司令官の統御に活用できたわけである。

第2章「電光石火のメッセージ (Messages by Lightning)」では、南北戦争前夜までの電信発展の過程^{プロセス}が語られる。サミュエル・モールの考案した短点^{ドット}と長点^{ダッシュ}の組み合わせコードによって文字や数字を電送する方式は、1846～1848年の米墨戦争で戦況報道に威力を発揮し、1850年代に鉄道ブームが到来するなか、列車運行の安全性を確保する手段として鉄道各社で広く活用される。こうして南北開戦時には、電信の効能が世間一般にも認知されつつあった。

第3章「電信が創る大統領 (The Telegraph Creates a President)」の冒頭では、リンカーンと電信の出会いが紹介される。1857年3月某日、イリノイ州ペキンの裁判所庁舎タズウェル・ハウスに併設された電信局で初めて文書が送受される様子を目撃したリンカーンは、のちに陸軍省電信本部の暗号電信士となるチャールズ・ティンカーから電信の原理や仕組みに関する説明を熱心に聴き、納得いくまで質問したという。

軍事面におけるこのニューメディアの有用性をリンカーンに示したのが、「若きナポレオン」の異名をとるジョージ・マックレーラン。開戦直後にウェストヴァージニア方面を制圧した彼が電信網を駆使して配下の部隊を自在に動かす様に触発されたリンカーンは、電信会社取締役を務めたこともあるエドウィン・スタントン陸軍長官^{はか}と諮って、軍用電信網の中枢をマックレーラン司令部から大統領官邸隣^{ホワイトハウス}の陸軍省へと移し、戦場からの生情報 (unfiltered messages) を直接入手できる体制づくりに着手していく。

第4章「電気による局面打開 (Electronic Breakout)」と第5章「打開以後 (After the Breakout)」は、南北戦争最初の山場となった

1862年5月の半島進攻作戦からアンティータム・クリーク会戦までの軍事戦略をめぐるリンカーンとマックレーランとの確執、そして紆余曲折を経てのマックレーラン罷免に至る経緯を、両者ならびにその周辺の人びとが交わした電報によって描き出す。

北軍総司令官を拝命したマックレーランはリンカーンの軍事上の判断力を信頼せず、戦闘督促の指令を再三無視したばかりか、電信網によって連係可能な10万の大軍を擁しながら、名将ロバート・リー率いる南軍壊滅の好機をみすみす逃してしまう。「貴殿は1ヶ月以上も軍馬に休息を与えましたが、いつになったらヴァージニア (リー軍本拠) に攻め込む御積もりですか？」とは、リンカーンがマックレーランを罷免する直前に送った電報の一説である。

第6章「電気の新たなる挑戦 (New Electronic Challenges)」は、軍事・行政面での指導力の強化以外に、電信がリンカーンにもたらした新たな可能性を四つとりあげる。

リンカーンはAP通信をはじめとする「報道メディア (News Media)」に対して戦地から電信で届けられる新鮮な情報を配布、国民に戦況を逐一包み隠さず報じることで、挙国一致の意識を高めていく。また、「電信の傍受と暗号 (Wiretapping and Ciphers)」は矛と盾の関係にあり、とりわけ後者は陸軍省電信本部の電信士によって解読不能な方式が考案された。さらにリンカーンは軍の士気や規律を維持すべく、電信によって各地の軍事裁判にも介入する。元弁護士^の面目躍如^{という}ところか……。電信はまさに「正義の番人 (Oversight of Justice)」としても機能した。心和むのは、リンカーンが自分の家族と電信で連絡をとりあった逸話^{エピソード}であろう。メアリー夫人や子供たちに宛てた電報には「夫として父として (Husband and Father)」の顔が覗いている。

第7章「電報ファイルによる指揮

(Commanding Through The Inbox)」と第8章「技術はそれを使う人間次第 (Even with Technology, It's All about People)」において語られるのは、ジョージ・ミードによるゲティスバーグ会戦の勝利とユリシーズ・グラントによるヴィクスバーグ攻略が南北戦争の転機^{モメンタム}となった1863年7月以降の情勢である。

マックレーランを解任したリンカーンは、いまや完全に軍用電信網の中枢に座し、遠く離れた戦場の状況を窺うだけでなく、前線の諸将に具体的な目標や指令を与えて軍事行動に対する介入の度を深めようとした。だが、リンカーンと陸軍省が電信網によっていかに権限の及ぶ範囲を拡張しようとも、戦いの成否は電線のむこう側にいる司令官その人の資質・能力にかかっている。

「とことん戦ってくれる漢^{おとこ}」グラントは、野戦電信網を駆使して各方面軍を自在に操り、南軍を追い詰めていくが、リンカーンや陸軍省に対しては必要最小限の報告を打電するにとどめた。彼の姿勢は、自慢の電信網を使って言い訳がましい電報を頻々とリンカーンやスタントンに送りつけたマックレーランとは好対照をなした。

第9章「現代型リーダーシップ・モデルの構築 (Building the Modern Leadership Model)」は、電信網をもちいた情報収集と軍事指揮権のさらなる強化によって、リンカーンが大統領として比類なき国家指導体制を完成させていく姿を辿る。

1864年7月のジュバル・アーリーによるワシントン奇襲を辛くも凌いだリンカーンは、アーリー追撃に後れをとったグラントに厳しい叱責の電報を送って震撼せしめた。「貴殿は私からの電報を読まずして、いかなる行動もとってはならない。これは強制である」という一節は、「軍事は軍人に任せよ」という態度をとるグラントに、最高指揮官たるリンカーンの存在感を

改めて印象づけたのである。

第10章「最後の1周 (The Last Lap)」と第11章「これで彼も不朽となる (“Now He Belong to the Ages”)」があつかうのは、1864年秋の大統領選挙前後からリンカーンがフォード劇場でウィルクス・ブースの凶弾に斃れるまでの半年間である。

リンカーンは1862年5月の半島進攻作戦以降、電信を存分に駆使して自身の指導力を強化すると同時に、軍事全般への発言権を拡張してきた。皮肉な逸話^{エピソード}としては、電信の父サミュエル・モールスが強硬な奴隷解放反対論者であり、早くから反リンカーンを表明し、「血に飢えた政府」の排除を叫んでいる。

だが、第6章で触れたように、リンカーンは毎日前線から電信を介して届く報告を新聞各社に流し、北軍の攻勢と踏ん張りの様子を逐一国民に知らせて批判的世論の緩和に努めた。あのマックレーランとの対決となった1864年11月8日の大統領選挙では、ウィリアム・シャーマンのアトランタ攻略^{おいて}を追風に圧勝、遂に「電気^{よろい}の鎧に覆われた国家統率モデル (the model for electronic management)」を完成させる。戦争の場裡において勝つことの本義が、相手に超えられぬ^{なにか}を存立させることであるとすれば、北部連邦のそれは軍用電信網にはかならなかったといえよう。

12月21日ジョージア州を横断したシャーマン軍のサヴァンナ占領、翌1865年3月4日リンカーンの第二期大統領就任式、4月2日南部連合の首都リッチモンド陥落に続いて、4月9日グラントから「アポマトックス裁判所にてリー將軍降伏す」との緊急電報が届く。ここに南北戦争は事実上終結した。そして、4月14日金曜日午後8時30分、メアリー夫人を伴ったリンカーンは、観客の大歓声に包まれながら、運命の待つフォード劇場特別席に腰を下ろしたのである。

Ⅲ 世紀を超える指導者像

周知のように、フォード劇場特別席でリンカーンはアメリカ大統領として初めて暗殺に斃れる。が、この悲劇によって、彼はいまだ広大な原野を残す成長途上の国家を救った指導者から世界規模で信奉される政治的偶像へと昇華した。しかも、19、20、21と遷る世紀のなかで、彼は常にその時代を象徴する人物という役割を与えられながら語り継がれていく。

MR.Lincoln's T-Mail は、なぜリンカーンが世紀を超える指導者像となりえたのか、その疑問の背後に潜む、語られることの少なかった事実^{テロ}に光をあてた。電線をアメリカ合衆国という肉体を巡る神経^{アイドル}に喩えるなら、リンカーンはそれを司る頭脳にあたるだろう。彼は電線＝神経を介して肉体器官たる軍司令部より戦況報告を受け、それに適応した指令を各器官にフィードバックすることで、戦争という国家＝肉体の営みを統制せんとした。

大統領官邸隣^{ホワイトハウス}の陸軍省電信本部に居座り、前線から届く電報に目を通し、また前線に送るべき電報の元文書を綴るリンカーンのイメージは、大恐慌から第二次世界大戦下でラジオ電波に乗せた炉辺談話により国民に希望を与えた第32代

大統領フランクリン・D・ローズヴェルト、米ソ冷戦下でテレビジョンをフル活用して国民に「国家への自発的な貢献」を訴えた第35代大統領ジョン・F・ケネディへと継承される。

そして、Wheeler が「e-mail による戦争」と呼んだイラク戦争の責任を追及されたジョージ・ブッシュ大統領は、2005年2月12日のリンカーン誕生日にケーブル・テレビで全米に放映されたリンカーン特集番組の最後に、「全ての人たちに寛容の心を」と呼びかけたリンカーン第二期就任演説を俳優に朗読させた。最大の国難^{あやか}を乗り切った偉大な先達に肖ろうとしたのか、それとも自身の失策に対する寛容を国民に乞うたのか……。

指導者の頭脳がメディアという神経をつうじて国家という肉体の営みを導く—— *MR.Lincoln's T-Mail* が描き出した「語られざる物語」は、じつのところ、第16代以降の歴代大統領が危機に瀕してのパフォーマンスのなかで雄弁に語り、ときに「騙ってきた」物語なのかもしれない。

[Harper Collins, 2006 [227.pp+xxi]]